

## ヒラメ漁獲量の状況と稚魚の出現状況

### 1. 令和7年のヒラメの漁獲状況

茨城県におけるヒラメの漁獲量は、平成23年以降増加傾向にありましたが、平成27年の597トンピークに減少傾向に転じました。令和7年は106トンで、前年(166トン)と比較すると減少し、東日本大震災以前よりも低い値となりました。(図1)。

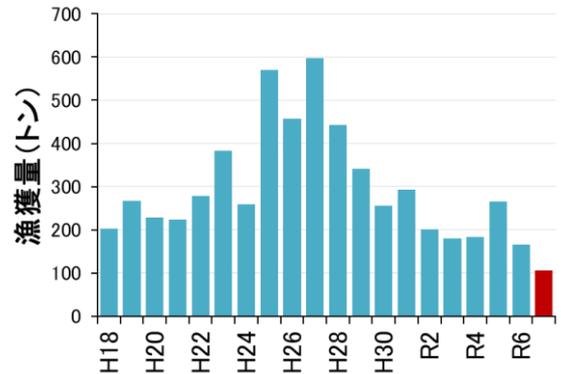


図1. 過去20年の茨城県のヒラメ漁獲量の推移(1~12月、属地集計)。

### 2. 令和7年生まれの稚魚の出現状況

水産資源の動向は、漁獲状況に加えて、産卵量や仔稚魚の生き残りに関わる環境条件等が影響します。水産試験場では、その年に生まれたヒラメ稚魚の加入水準を把握するため、4~12月に月1回、銚田市玉田沖(距岸0.25~2.0マイル、水深約6~20m)で分布密度を調査しています。昨年生まれの稚魚は1年後には約30cmに成長し、漁獲されるようになります。

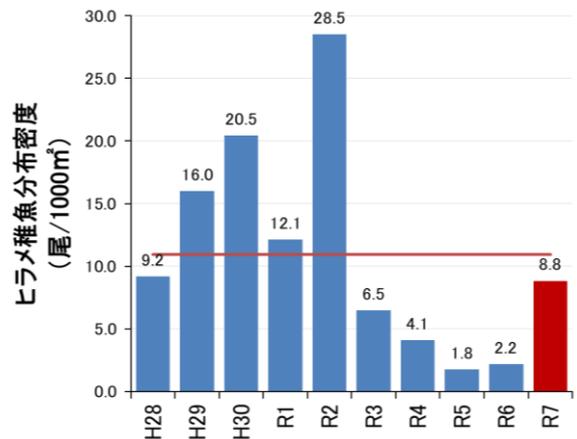


図2. 玉田沖におけるヒラメ稚魚の最大分布密度の経年推移。横線は過去10年の平均値(11.0尾/1,000m²)を示す。

令和7年におけるヒラメ稚魚の最大分布密度は8.8尾/1,000m²で、前年(2.2尾)より上向きでしたが、過去10年の最大分布密度の平均値(11.0尾)を下回り、稚魚の分布密度は低い結果となりました(図2)。

また、国の資源評価によると、本県のヒラメを含む「ヒラメ太平洋北部系群」は平成22年に卓越年級群が発生し、平成23年に1歳魚が多く加入しました※1(図3)。それ以降は横ばいの加入が続いていましたが、令和6年は前年を下回る加入であったと推定されています。

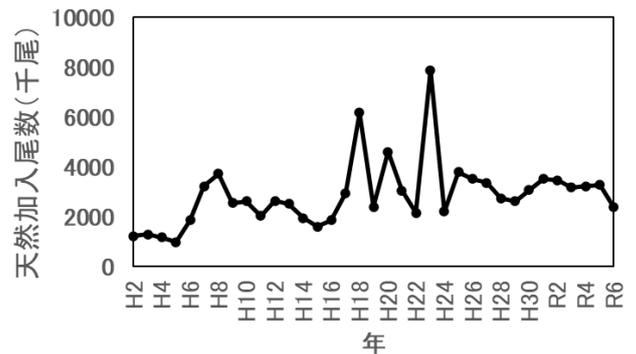


図3. 太平洋北部系群における平成2年~令和6年の天然加入尾数(1歳魚)の推移。 ※1

平成22年の卓越年級群は翌年以降に漁獲加入し、平成27年にかけての漁獲量の増加(図1)に貢献しました。当場の調査における令和7年の稚魚の分布密度は低い結果となり、太平洋北部系群における令和6年の1歳魚はやや少ないと推定されることから、今後のヒラメ資源に注視していきます。

(定着性資源部 西)

※1 令和7(2025)年度ヒラメ太平洋北部系群の資源評価より作成

[https://www.fra.go.jp/shigen/fisheries\\_resources/meeting/stock\\_assessment\\_meeting/2025/files/sa2025-sc02/fra-sa2025-sc02-03.pdf](https://www.fra.go.jp/shigen/fisheries_resources/meeting/stock_assessment_meeting/2025/files/sa2025-sc02/fra-sa2025-sc02-03.pdf)

【次号予告】R8.3.6発行の「水産の窓」は『冬春季の漁海況予測』を予定しています。